

ゆずな歳時記

登場人物



■若木 ゆずな 御蔵橋に住む中学一年生の少女。ちんまりとしたおさげ髪とどんぐりまなこが特徴。早くいちにんまえの大人になりたいと願うが、そそっかしさからの失敗も多い。

■雨宮 旬 御蔵橋に引越してきた少年。おつとりとした繊細な風貌と物腰を持つが――



■堤 夏生 ゆずなのクラスメイトで、豆腐屋の娘。水泳が何より好きな、ショートカットの元気少女。



■八重垣 縁里 ゆずなの中学校のクラスメイト。古風な丸眼鏡をかけており、けたるげで淡々とした言動を常とする。クラスの影のご意見番。

■小野寺 陽子

ゆずなのクラスメイト。押し強さと行動力を持つクラスの中心人物だが、意外と足元がおろそかで、八重垣 縁里にはよく隙をつかれて防戦一方になる。



■相羽 響 ゆずなのクラスメイト。小学校

まで海外に暮らしており、いささか硬い物言いと凛然とした雰囲気を持つ。接骨院と武術道場の養子。

■鹿島先生

ゆずなたちのクラスの担任の先生。

■伊沢 慎吾

ゆずなのクラスメイト。堤 夏生の幼馴染で、朴訥で真面目な性格ゆえに夏生との小さいさが多い。





序

ゆずな歳時記

くるくる、はらり。

木漏れ日を照り返すちいさな金色のかけらが、不意に目の前を舞い落ちた。

「——はぁ？」

大きなどんぐりまなこをきよとんと見開いて、若木^{わかぎ} ゆずなは呆けた声をあげる。

短冊形をした正体不明の飛行物体は、立ち止まるゆずなの前をゆっくり斜めによぎって——雨上がりの石畳の上に、ぴたりと貼りついた。

屈みこんで拾い上げ、ゆずなはようやくそれが何であるかを確認する。

「——しおり？」

そう。

薄い金色の板に紐を付け、切絵細工風の加工を施した——お土産屋さんなどでよく売っている、それは葉だ^{しおり}。

「——どこから……落ちてきたんだろ？」

両手の指で葉をつまみながら、ゆずなはまなざしを巡らせる。通りの向こうには、さらさらと浅いせせらぎを湛えた水路。

流れの向こうには、家の二階ほどの高さがある苔むした石垣。

江戸時代の初めまで城下町だったこの御蔵橋^{みくらばし}には、いまでも

石垣と水路がその面影を残している。

「すみませーん」

金色の短冊を頭上にかざして、ゆずなは呼びかけてみた。

「どなたか、しおりを落とされませんでしたかー？」

高い石垣の上には、まだ若い緑を六月の風にそよがせる紅葉の枝。その向こうにあるのは、本蔵城址公園^{ほんくらじょう公園}の敷地だ。

もしかしたら、誰かが読書にいそしんでいて落っことしてしまっただけかもしれない。

けれども、たっぶり十秒ほど待ってもこたえは返ってこなかった。耳に入るのは水路を流れる水のせせらぎと、どこか遠くで響く鳥のさえずりだけだ。

「お——い——い！」

ちいさな身体をぐぐいと伸ばして、ゆずなはせいっぱいの声をはりあげた。

「しおり！ 落としましたよー！ おとしものです！ だれか

——！ いませんか——！！」

雲ひとつない雨上がりの空に、呼びかけは高く遠く吸いこまれ——

「——あ！」

そこでゆずなは、はっとして手のひらで口を覆う。

いけないいけない。またやってしまった。はしたない。

中学校にあがってもう二ヶ月。いままでよりもすこしはおねえさんにならねばならないと常々思つてはいるのだが——ことあるごとに地が出てしまうゆずなだ。

顔を赤くして周囲を見回す。

学校からの帰り道——城址公園の石垣に沿つてのこの通りは、昼下がりには車はおろかほとんど人も通らない。幸いなことに、いまの大声は誰にも聞かれていないようだった。

——そ、そうだよねつ。もう小学生じゃないんだし。

制服の胸リボンをきゅつと整え、気を取り直してゆずなは歩きだす。

めんどろくさがつて下で大声を出したりせずに、きちんと公園まで歩いて登つて落とし主を探す。それこそが、目指すべき大人のふるまいというものだろう。うん。

ちいさな身体よりいささかサイズにゆとりのある、糊のきいたセーラー服。手足をまっすぐ伸ばして路地を行くその姿はどこかぎこちなく、「学芸会で中学生役を懸命に演じる小学四年生」といった感じのあどけなさを醸し出してしまつていたが——そんなことはつゆ知らず、当のゆずなはいたつて真剣である。ゆずなの家は、父娘ふたり暮らし。この御蔵橋で、ちいさな

喫茶店を営んでいる。

はやく一人前になつて、お店を支えていきたい。そのためにはまず、中学生というこの大人への階段一段目を、しっかりと登つていかななくてはならないのだ。

水路にかかる小橋を渡り、石垣の上へと続く階段を登る。大きく息を吸い込むと、雨上がりの空気の中に微かな苔の匂いが混じつた。

「ていつ、ほつ、よつ、」

ちんまりとしたおさげの髪をはずませ、長い石段を一段跳ばしに上へ、上へ。勢いとタイミングを計つて、最後の数段をホップ、ステップ、ジャンプ。

「とお——うっ！」

そろえた靴先がたばあん！ と景気のいい音をたて、辺りの鳥たちが一斉に空へ舞いあがり——

「——あ」

そしてゆずなは、自分がまたやつてしまつたことに気付く。いまのは、大人の、おねえさんのふるまいと呼べるものではなく。断じてなく。

「う、あ、こ、こまかいことはきにしない！」

声に出して自分に言い聞かせると、思いきり首を横に振る。

ことあるごとに煮詰まってくるぐるぐる回っているようでは、大人への道は遠いのだ。

手の中の葉を見て自分の使命を確認すると、ゆずなはまなざしを前方に向けた。

神社の参道を思わせる、石畳の遊歩道。

花や樹々が季節ごとに色づく本蔵の城址公園だが、六月のいまは紫陽花の季節だ。公園の中に向かって伸びた路の両脇を、淡い紫の色彩が飾っている。

——よう——しっ！

雨上がりの澄んだ陽射しに瞳を輝かせ、ゆずなは公園の奥へと走り出し——

「——あのっ！」

数歩を行ったところで、その声は唐突に耳に届いた。

「——へ？」

ななめ、うしろ。

ゆずなは思わず振り返り、されど前に向かうダッシュの勢いは殺せず——

「うあつ、わ、わたっ」

足がもつれ、くると視界が回る。紫陽花、空、石畳、紫陽花、空。

その視界の端、石畳の上に革靴とグレーのズボンの裾がよぎった瞬間、ゆずなの身体は致命的にバランスを崩した。

ひゃわーう！ というあられもない悲鳴とともに、うつぶせに倒れ込んでしまう。顔こそはぶつけなかったものの、そろえて石畳についた両膝はけっこう痛い。

「ごめん。ええと……大丈夫？」

頭の上から降ってきたのは、すこしばかり困惑気味な声。

「んあ……は、はい——」

半ば腹はいになったまま、ゆずなは何とか声の方に顔をあげ——その姿勢のまま、見事に凍りついた。

男の子だ。しかもおそらくは、ゆずなと同じくらいの年の。

整った——さりとて、男前とかハンサムという感じとはちょっと違う、涼やかで繊細そうな面立ち。

男の子にしてはさりと柔らかな黒髪。眉にかかったその前髪の下で、澄んだまなざしが不安げにゆずなを見つめている。

彼はこちらに腕を伸ばしかけ、途中でためらうように動きをとめた。どうやら、ゆずなが四つんばいなのでどう手を差し伸べるかを考えあぐねている様子で——

——四つんばい？

自分が相手にお尻を向けたままであることに、ゆずなは今さらのように思い至る。しかも、腰の位置が頭より高い、はしたないことこの上ない格好で。

「わ！ あ、あああつ！」

あげた悲鳴は大人もお姉さんもあつたものではないけたたましさだったが、もうそれどころではない。頬と頭と胸の奥で熱の塊かたまりがはじけゆずなはその爆発に押されるまま無理矢理に身体をひねり起こさんとしてうまくいかずあやうく男の子に回し蹴りの足払いをくらわせそうになり男の子はなんとか身を退ひいてそれを避けてゆずなはさらに真っ赤になりごめんなさいと言おうとして舌がもつれ、れ、わあ。

へたりこんだまま振り回した手を、男の子が静かに挿んだ。

意を決したような、表情と動きとで。

「——立てる？」

「——う——」

真っ赤に茹ゆだったまま、ゆずなは痙攣けいれんした水飲み鳥よろしくこくこくと頷いた。

華奢な腕からは意外に感じる力強さで、身体が引つ張りあげられる。よろけながらも、ゆずなはようやく立ちあがること

できた。

「えと、その、す——すいませんごめんなさいっ！」

腰が折れんばかりに、深々と頭を下げる。悪かったとか何とかいうよりもう、相手の顔を見ていられない。

「いや、その——」

いくぶん硬めの声で、男の子は口を開いた。

「僕のほうが、悪かったと思う。へんなタイミングで声かけちゃったから」

『僕』という一人称と慎重そうな物言いが、外見によく見合う。目を上げておそるおそる顔を伺うと、男の子はほんとうに申し訳なさに眉を曇らせていた。

「そ、そんなことないよってばです！」

ゆずなは照れのあまりに敬語の形成に失敗する。ぜえぜえと即座に深呼吸。気力を振り絞って相手の顔を見てもう一度。

「わたしが、勝手に、転ん、だのがいけないだもん。ごめんなさい、たすけて、もらっちゃったりして」

「いや、助けたなんて。手を引っぱただけだしさ」

同じくらしいの年とは思えない静かに落ち着いた口調で言いかけて、そこで彼ははつとまなざしを落とした。

何とはなしにまだ、繋がったままの手。金色の葉しおりをゆずなの

指が握り、そのゆずなの手首を彼の指が掴んでいる。

沸騰したやかんに指を触れたように、ふたりは同時に手を引つ込めた。

ゆずなの指を離れた金の葉が、はずみでふわりと真上に舞い上がる。

「あ」

慌てて伸ばしたふたりの指が、同時に葉を捉えた。

ふりだしに戻る。顔を見合わせて固まる、ゆずなと少年。

ゆずなは見る。男の子の顔に、きまりわるげな照れの色が浮かんでいるのを。そして、彼の腕に――

「あ、ええと」

ももごと口ごもりつつ、ゆずなは切り出す。少年の脇に抱えられた、大きな本を見つめながら。

「もしかして――この葉――ええと、あ、あなた、の？」

『あなた』というなんでもない一語を紡ぎ出すのに、ゆずなの唇は多大な労力を要求した。だめだだめだ、こんなことでは目指す大人への道はほど遠い。

「う――うん」

色白な頬を微かに赤らめて、男の子は頷いた。

「上のベンチで本読んでたら、風で飛ばされちゃって」

「そ――そう、なん、だ」

ぱくぱくと唇を動かしながら、しかしゆずなは葉にかけた指を離せない。

少年のほうもどうやら、動くタイミングを掴めずにいるよう
で。

はたから見たらハイタッチでも交わしているようなポーズのまま、彫像のようにふたりは固まる。

古い石畳を、柔らかに照らす陽の光。紫陽花の葉の上にきらめく雨露。先ほど飛び立った鳥たちが、樹々の枝で再びさえずりの声をたてはじめた。

梅雨のはじめの晴れ間。紫陽花の盛りが巡りくる、ほんのす

こし前。

これが――若木 ゆずなと雨宮 旬あまみや しゅんの、初めての出会いだった。





ゆずな歳時記

第一話

はじまりの朝

晴れた空を、一羽の雲雀ひばりが飛んでいく。

翼が描く緩やかな軌跡の下には、朝の陽射しに照らされた町並み。

御蔵橋みくらはしというこの町は、空から見るとお皿にちいさなプリンを伏せたような地形をしている。

プリンにあたるのは、町の中央にある城跡——本蔵城址公園もとくらじょうしこうえんの台地だ。お城そのものは何百年も前に取り壊されていまや跡形もないが、周りを囲う石垣が古い日々の名残を今に残している。

初夏のこの時期に空から町を見おろせば、いちばん多く視界に入る色は樹々の緑。それに次いで、家屋の瓦の黒、家壁の深茶、蔵壁の白、といったところ。

城址公園の高台の上はほぼ全てが草花と樹々に占められており、周囲の町中にも辻々に紅葉や桜が植えられている。ビルと呼べるような建物はあまり見られず、古い木造家屋や白い壁の蔵が目立つ。総じて、穏やかで地味な色彩の町なのだ。

城址の高台の方へ向けて、雲雀ひばりはゆつくりと高度を落としていく。

碁盤ごばんの目状に敷かれた路地。通勤通学時を過ぎたこの時間、あまり人の姿はない。路地に沿うように町の各所を流れる水路

が、朝の陽光を穏やかに照り返した。

幾本もの細い水路が縦横に走るこの町では、自然、小さな橋の数も多い。古い商家の蔵とともに、「御蔵橋みくらはし」という町の名をそのままにあらわしている。

ひそやかに屋根を連ねた町の空を横切り、城址の高台へ。紫陽花に彩られた石畳の上を飛び行き、台地の端をかすめるように雲雀ひばりは飛ぶ。

ほどなくしてその進路に、この町ではひととき大きな石造りの建物が現れた。

城址公園、南西の外れ。スプーンでプリンを食べかけたように、緩いL字型に高台が削れた一角。町なみを見おろすこの位置に建っているのは、御蔵橋みくらはし中学校の校舎だ。

三階建の本校舎と、木造二階建の旧校舎。その脇にやはり古い木造りの講堂と、二十五メートルのプール。斜面に造られているので学校としては小さめで、校庭もごく狭い。

バスケットボールのコートはなんとか二面取れるが、サッカーや野球は無理だろう。ただでさえ面積がないのに、けやきや桜の大きな樹が幾本も敷地内に根を下ろしている。

雲雀ひばりは、そのうちの一本——本校舎の脇に佇むけやきの枝に舞い降りた。

き——ん——こ——ん——か——ん——こ——ん——

のんびりと澄みわたる鐘の音が、校舎から聞こえてくる。

きよろきよろとせわしなく頭を巡らせていた雲雀は、ふと動きを停めた。

開かれた二階の窓。教室の窓辺からこちらを見上げるひとりの女子生徒と、まなざしが交わる。

いや——交わる、という言いかたは間違いだらうか。

少女のおおきなどぐりまなこは、こちらを向いていながらおそらく何もとらえてはいない。まだ眠いのか、それとも思案ごとの最中なのか。あどけなく唇をつぐんだまま、少女はぼんやり窓の外を眺めている。

ちいさな細いおさげと、古風なセーラー服の胸リボンが、朝のそよ風に揺れた。

それでも彼女は動かない。華奢な身体を微かに傾け、机に頬杖をついて。まるで、目を開けたまま眠ってしまったかのよう

に。

そのまま、しばしの時間が経過した。

き——ん——こ——ん——か——ん——こ——ん——

いまいちど、チャイムの音が響く。

羽を休め終えてか、留まることに飽いてか、その鐘を合図に

雲雀は再び空へと飛び立った。

あとに残されるは、窓辺の女生徒。

朝の空気の中、始業前のざわめきが校舎の中から穏やかに響いている。



「おはようっ！ みんな！」

活力いっぱい的一声が、始業前の教室にこだました。

声の主は、部屋に飛びこんできたばかりの堤夏生だ。肩掛けの鞆を自分の机に放りつつ、彼女は最短距離のルートで教室を横断する。

「あ！ おはよう！ ゆすな、ゆすなっ」

校庭側いちばん後ろの席に座る若木ゆすなに気付くと、夏生はびよんぴよんと跳ねながら手を振った。男の子のような短めの髪が、元気よく上下に揺れ踊る。

が——

「あれ？ ゆすな？」

教室いっばいに響く夏生の声を二メートルの至近距離に受けて、若木ゆすなは全く反応する様子を見せない。おさげ髪の後

ろ頭をこちらに向けて、窓の外を見つめるばかりだ。

部活の朝練からぎりぎりまで教室に駆け込んだ堤 夏生は、ここに至ってはじめて、一年一組に発生したささやかな異変に気付く。

そう。いつもならば窓際のゆずなを中心に発生している雑談の輪が、今日は見うけられない。

「？　？　？　？」

頭の上に疑問符を鈴なりにしてまなざしを巡らせ――

「あ、いたいたつ。おはよつ、響、縁里」

教室の反対側に、ようやく彼女は友人たちの姿を発見する。

「ああ――おはよう、夏生」

「……おはようございます」

低めの澄んだ声で応えたのは相羽 響、一瞬遅れていささか眠たげに応じたのは八重垣 縁里だ。いつもは朝の世間話メンバーなはずのふたり。

「ど、どしたの？　いったい。あ、朱美とか陽子とかは？」

「朱美さんは散歩中、陽子さんは日直で職員室です。」

どうしたの、というの？

何事もないように、淡々と縁里が訊ね返す。

楚々とした――という形容がよく似合う色白細面の顔と、う

なじの後ろを白リボンでまとめた長い黒髪。切り揃えた前髪

下には、縁里のトレードマークでもある古風なデザインの丸眼鏡。レンズの向こうのまなざしは、いつも通りに涼しげで。

「いや、そのつ。あれよ、あれあれ。ゆずなゆずな」

ばんばんつ、と机を叩き、もう片方の手で夏生は窓辺のゆずなを指差す。

「何で朝から電池切れちゃってんのあの娘」

「それが――解らないんだ、私達にも」

側らの相羽 響が、腕を組んで答える。

「会ったときからあのような様子だった。何を聞いても芳しい答えが得られない」

十歳まで海外で曾祖父に育てられた響は、少しばかり言葉遣いが硬い。しゃんと伸びた高めの背丈と、短めに切りそろえた髪。凜然とした印象のある少女だ。

「そっかー――うーん、大丈夫なの？　あのままにしといて。」

具合とか悪いんじゃない？」

「放っておいても構わないと思います」

手元のノートからまなざしをあげないまま、縁里が口を開く。

「あの娘が上の空なのは、別に珍しいことではありませんし」

白く細い指を唇にあてて、縁里はふわ、とけだるげにちいさ

な欠伸をする。

「そ——」

そりゃちよつと薄情じゃないかなあ、という言葉を、夏生は途中で呑みこんだ。

このクラスの中で、若木ゆずなといちばんつきあいが長いのはこの縁里だ。

いや、別に長いからどうだというわけでもないのかもしれないが。それを差し引いても、彼女の他人を見る目というのは実に確かなのだった。

八重垣 縁里。御蔵橋中一年一組女子、影の御意見番。

彼女自身高圧的などころは全くなく、むしろ淡々としたスタンスなのだが——議論不得手の単細胞を自認する夏生としては、面と向かって異を唱えにくい相手である。

いや、でもさ、そのつ……と口ごもる夏生を、縁里が静かに見あげた。

「もつとも——」

丸眼鏡のレンズの奥で、瞳がほんの微かに細められる。

「純粋な好奇心として、すこしも気にはならないといえば嘘になりますけれど」

「確かに」

腕組みをしたまま、響が重々しく頷いた。

「昨日の下校の時点では、あのような風ではなかったしな。帰り路か家で、何かあったのかもしれない」

「でしょ？ そうでしょ!？」

わずかに開いた突破口を逃すなどばかり、夏生はふたりに顔を近づける。

「ほらっ。もしかしたらゆずな、お店のことで困ってるのかもしれないじゃん。だとしたら、同じ御蔵橋住人として放ってはおけないよね。助けてやらないと、えっと、あれよ、ソウゴゴ、ジヨの精神ってやつに反するよねっ?」

ふたりの反応が返ってくる前に、さっと手をあげて彼女は言葉が続けた。

「あたし、聞いてきちゃってもいいかな。なんにしてもほら、がつつと目覚まさして活入れてやらないと。授業受けるのに困るでしょあのままじゃ」

「……どうしてわざわざ私に許可を?」

縁里は表情を変えないまま、ちいさくひとつ溜息をつく。

「まあ、構わないのではないでしょうか、別に。」

活を入れるのは結構ですけど、ゆずなに怪我とかはさせないようによろしくね

「うわ、ひどいよその言いかた。あたしのことミサイルか何かだと思ってるない？」

頬を膨らませてみせた夏生を、縁里はちらりと見上げる。アンティークの丸眼鏡ごしのまなざしは、ひんやりと静かで、しかしなにやら物言いたげで。

「い、行ってきまーすっ」

不穏な雰囲気を感じ取った夏生は、びしっと敬礼を決めると慌てて回れ右をする。

みくらはし
御蔵橋中学一年生唯一のクラスである一組は、男子六人女子十一人の計十七人。

人数の関係でゆずなの隣は空席だ。通路に立つ夏生なつおと席に座るゆずなの間に、障害物はなにもない。

「ゆーずなー」

両者の距離は二メートル。気をつけの姿勢で、夏生は呼びかける。

されどやつぱり、ゆずなは窓の外をぼんやり眺めたまま。

——むむむ。

くつきりと濃い眉毛を八の字に寄せて、夏生はその視線の先を追ってみる。

樹の枝の向こうにはグラウンドと、いつもと変わらぬ城下の街並み。二十分以上もぼんやり眺め続けるものがそこにあるとも思えないが——ともあれ、昨日に続いて梅雨の晴れ間、町の上に広がるのは洗いざらしの澄んだ青空だ。

もったいないじゃんゆずな、と夏生は思う。

せっかくこんないい天気なのに、朝からネジが切れたみたいにして。悩みとかなんかそういうのがあるなら、へろっと吐き出してすつきりすればいいのにさ。

——いま目覚ましたげるからね、ゆずなっ。

口元に笑みを刻むと、夏生はぐぐっと姿勢を落とす。普段からの走りこみで鍛えたふくらはぎと腿の筋肉に、静かに力を溜める。

ごくごく常識的に考えたならば——近づいて若木ゆずなの肩をぽんと叩くというやりかたが、この場合最も適当というものだったろう。

けれども、そういう穏やかな方法を選ぶには、今の夏生にはエネルギーが有り余りすぎていた。

つつみ なつお
堤 夏生は、水泳部員である。

三度の飯も好きだがそれを上回って泳ぐのが好きで、休部になつていたこの学校の水泳部を入学早々職員室にかけあつて復

活させたくらいの筋金入りだ。

だがしかし、いくら水泳部が立ち上がったとしても、プール開きまではまだすこしばかりの間があるわけで。

待ちに待ったその日に備えて、毎朝毎夕のランニングに余念のない夏生だが——たまっていく活力に、それだけではとうてい発散が追いつかない。

すうっ……と、夏生は両腕を差しあげる。伸ばした指の先には、若木 ゆずなの背中。

夏生の意識はすでに、見えない飛び込み台の上にある。澄んだ大きな瞳には、ここにはないプールの水面みなもが映っており——大きく息を吸い込むと、夏生は揃えた両足で力の限りに床を蹴った。

「れっつ、だ——いぶっ!!」

「ごん! という盛大な激突音は、教室の隅々まではつきり響きわたった。

『ひゃわあああああ!? あ、あ? あわ、あああ』

それに続く、すっとんきような悲鳴。最後に、がんがらがっしやーん! と景気のいい机と椅子の崩壊音。

教室内の視線がいつせいに窓際のほうを向き——しかしすぐ

に皆は、各々の雑談や自習に戻っていく。なんだ、またいつも、の堤のあれか。

「や——八重垣やえがき」

「——大丈夫ですよ」

いくぶん硬直した響ひびきの声に、縁里ゆかりはノートに目を落としたまま答える。

「ああ見えて、そこそこ頑丈ですからゆずなは」

ああ。いや、それはわかっているのだががしかし——と不安げに表情を曇らせつつ、響はゆずなの席に向かう。

残された縁里は、そのまま机に向かうこと十数秒——きりのいいところまでノートを書き込んでから、おもむろに万年筆を置いた。

「……ミサイルというのはですね、夏生さん」

欠伸とも溜息ともつかない、微かな息をひとつ。

「もう少し戦略かんがえあつて飛ぶものだと思いますよ」

肩を竦め、愛用の丸眼鏡を指で正して。それから彼女はようやく、ゆつくりと腰をあげた。

「……きゆう」

天井が見える。

若木 ゆずなには、何が起きたのか把握できない。

気がついたら自分は仰向けに倒れていて、誰かが自分の身体の上に乗っかっていて。ただ、その誰かがかき抱いていてくれたおかげで、頭や腰を床にぶつけはしなかったらしく。

「ごめんゆずなっ、大丈夫だった？」

声とともに、その誰かの顔がひよいと目の前に現れた。

「――夏生なつおちゃん？」

「おはよっ、ゆずな。やー、ほんとごめん、ちよつとやりすぎちゃったかな」

身を起こしてゆずなの上から退きながら、夏生はあははは、と快活に笑う。それを見てゆずなは、ようやくだいたいの事情を察した。ああそうか、いつもの夏生ちゃんのこれか。

「怪我はないか？」

かけられたもうひとつの声。相羽あいは響ひびきが、端正な顔を曇らせて

こちらを覗きこんでいる。

「あの倒れ方では、受身も取れていないだろう」

「そうそう。もう、びっくりしちゃったよゆずなっば。いくらぼーっとしてたからって、そのままばーんっ！ っっていうちやうなんて思わなかったんだから」

「だ、だいじょうぶっ。ごめんね」

夏生たちに頭をさげてから、ゆずなはあれ？ とどんぐりま

なこをしばたかせる。ちよつとまった、どうしてわたしあやまつてつてるんだろ。なにかへんだこの流れ。

「あははは、いいいいいよ気にしなくって」

まだ寝たままのゆずなの肩を、夏生が景気よく叩いた。いや、

その、夏生ちゃん、そうじゃなくってあの――

「ところで、さ」

のしかかるように、夏生の顔がまた近づいた。

「ゆずな、そもそもなんで朝からそんなにぼんやり――わきやつ！」

発せられた問いはしかし、突然に悲鳴に変わる。誰かが後ろから、丸めた教科書で夏生の頭をはたいたからだ。

「なにやっつてんだお前はいつもいつも」

「……つたたたあ。

何さ慎吾しんご。あたし今、大事な話の最中なんだからっ」

「悪い、若木。馬鹿が迷惑かけたな。頭とか打たなかったか」

振り返った夏生の抗議は無視して、伊沢慎吾いざわしんごがゆずなに深々と頭を下げる。



学生服の似合うがっしりとした体格と、朴訥ぼくたく、という言葉が似あう顔立ち。応援団とかをさせたらしつくりきそうな彼は、堤つみ夏生の幼馴染だ。

「なっ……なんで慎吾が勝手にあたしのことで謝ってんのさっ！」

「お前がきちんと若木に謝らないからだろうが。まったく、ガキじゃないんだからもうちょっと考えて行動しろよ。あとで苦労することの身にもなってみる」

「だからっ、信吾に何の関係があるってきいてんの！」

「——あ、あう、あああ。ちよ、ちよっと夏生ちゃん」

響に助け起こされながら、ゆずなはおろおろとふたりのほうを見る。だがもはや、爪先立ちつまずき立ちになって慎吾を睨み上げる夏生の耳に、静止の声は届く気配もない。

ともかくなんとかしくなくっちゃと足を踏みだしかけた——その進路を遮るように。

「……夫婦喧嘩は放っておけばよろしいと思います」

声とともに、すうっと音もなく割り込んだ細い影。

「縁里ちゃん!？」

「——いい今なんか言わなかった!? 縁里っ」

「いいえ別に何も」

顔を真っ赤にして振り向く夏生の問いに、縁里はそっけなく答える。

「続けるなら向こうでお願いできますか。先生が来るまでにゆずなの一件が解決つかなくなりますから」

「へっ」

わたしの？

呆けたように目を見開くゆずなの額に、縁里がひたり、と手をあてた。ひんやり冷たい縁里の指の感触に、ゆずなはうひゃあ、と声をあげる。

「……熱は無いようですね」

「ね、熱っ？ ちよっとまって、縁里ちゃんそれっていったいなんの——」

「——おはようございます、ゆずな」

「え？ あ、お、おはよ」

唐突な挨拶に、ゆずなは面食らいながらも応える。と、縁里は微かな苦笑とともに肩を竦めた。

「先程も同じ挨拶をしたのですが、気づいていらつしやいましたか？ 私だけではなく、響さんや夏生さんたちもですけど」

「あ——え？」

思わず両頬を手でおさえて、ゆずなは顔を赤らめる。

「ご、ごめんね！ ちょっと、その、ええと——考えごととしてぼーっとしちゃってて」

「考えごとというのは——何かあったのか？ 若木」
不安げに眉を寄せて、響が尋ねた。

「私達にできることがあれば、力になるが」

気がついてみれば夏生と慎吾も小競り合いを止めて、じつとこちらを見つめている。四組のまなざしに包囲され、ゆずなは思わず両の手のひらを前につきだした。

「え？ あ、う、ううん、なにもないよ。そんなんじゃないよ。ほんとうに、なにもないからっ。考えごとって言ったのも、その——うそ、まちがい！」

「……そうですか」

頷くと、縁里はゆずなの肩に手を置いた。丸眼鏡の奥の目を、静かに細めながら。

「それで——何がありました？」

縁里の唇に浮かぶ微かな笑み——清楚可憐せいそかれんそのものなのに擬音では『にやり』としか表現できない、危険な微笑。

「う、あ、」

この表情を浮かべた縁里に抵抗を試みて、過去あまり幸せな目にあつたためしはないゆずなだ。

「ほーらゆずなっ、吐いちゃえ吐いちゃえっ」

瞳を輝かせて、夏生が援護射撃に加わる。

——そ、そんなこといったってっ。

ほんとうに、なんでもないのだ。きのうちよつと、あんなことがあつただけで。

あんなこと。城址公園での一幕。その顛末てんまつがまた頭の中に甦り、ほっぺたの表面温度がはね上がる。

だめ。話せない。話すわけにはいかない。途中で顔から火を噴いてしまえそう。ただでさえ今日は朝から、昨日のことばかりぐるぐる頭を回ってなんだか調子がへんなのだ。ぐるぐるぐるぐる。ああ、もう、どうしちゃったんだろわたし。

「……やはり、どこか調子が悪いのではないか？ 若木」

声の調子を落として、響がたずねた。

「少し頬が火照っているような気がするのだが」

「何か精神的なもののだと思いますよ。……ええ、やはり熱はありませんし。ほら、触れてみてくださいな」

「どれ——ああ、成程」

「あ、あたしもあたしも！ うわ！ でもおでここんな汗かいてるよっ？」

「わああ、わ、わー」

たくさんの手のひらにいいように触られて、ゆずなは情けない悲鳴をあげる。

「……何やってんだよ相羽たちまで」

慎吾くんが呆れたように溜息をついた。

「いかげん先生来るぞ。知らんからな、騒いでて怒られても」

そう。そうだってば。落ちつこうよみんな。がんばれ慎吾くんっ。まなざしに祈りを込めて、ゆずなは友人たちを見まわす。

「大丈夫だってばっ。肝っ玉小さいんだから慎吾は」

夏生はまるで意に介さず、ゆずなの願いははかなく潰えた。

が——

「——そういえば確かに——今朝はみえるのが遅いな、鹿島先生」

響が発したその呟きに、皆の視線が一瞬、教室の時計のほうを向く。

ちゃんす到来！

「せ、先生まだ職員室か校長室だとおもうよ！」

生じたその隙について、ゆずなは思いつきり声を張りあげた。いまだ。わたしのことから話題をそらすなら、もういまいかない。

「時間かかっているんじゃないかな、あの、そのっ——」

うああ口ごもるなゆずな。なんたって四対一だ。一気にたたみかけないとごまかせない。喋れ。なんだっていいから、ええとええと、

「——ほらっ、雨宮くんの転入手続きとか、そういうので！」

びたり、と。

その場の空気が凍りついた。

夏生や響たちだけではない。教室内に満ちていたざわめきがひとときに止んで——みんながみんな、きょとんとした表情でゆずなのほうを振り返る。

「——は——え？」

劇的なその反応に、ゆずなははっと我に返り。

そこでようやく、頭の中にリフレインする。焦りのあまり思わず口走ってしまった、自分の台詞の中身が。

「……転入？」

「…………雨宮くん？」

「…………どなたですか？ それは」

「ひゃ、わ、わわわあああ！」

いまさらぶんぶん首を振っても、発した言葉は取り消せない。

時間はもとに戻せない。

若木 ゆずな、十二歳。むき出しの地雷を、真正面から踏む女。

「——皆さん」

静まり返った教室内をちらりと振り返ってから、縁里が厳かな仕草で右手を挙げた。

「本格的な尋問が必要かと思われませんが——どなたか異議があれば」

もちろん。

異議なんてさしはさんでくれるひとは、この状況ではいようはずもなく。

「では、ゆずな」

こちらの肩に手を置いたまま、縁里が息が届くほどの距離に顔を近づける。丸眼鏡のフレームが、死神の鎌のようにひんやりと光った。

身投げしようかと、ゆずなは思う。二階から飛び降りたら、やっぱり痛いだろうか。

絶体絶命、四面楚歌。あうあうとあえぎの声をあげながら、ゆずなが窓向こうの青空を仰いだ——その時。

ぱたぱたぱたぱたっ！

廊下から聞こえてくる、威勢のいい足音、

「総員、すぐ着、席——っ！」

声から先に戸口に現れたのは、今日の日直、小野寺陽子だ。おのでら しょうこ
「ほら廊下のひとたちもさっさと教室入った！ 先生来るわよ！ 推定猶予時間、四十秒っ！」

あ、あと！ ——はいはいみんなこっち注目！」

癖つ毛セミロングの髪を勢いよく弾ませ、陽子は教壇に駆けあがる。丸めた学級日誌でだだんだん！ と講談師みたいに机を叩き、ぐるりと教室を見渡してウインクをひとつ。

「ニュースよニュース！ 時間ないから手短に言うわね。

転校生よ！ 男の子！ いま校長室のところで立ち聞きしてたんだけど、名前は雨宮——」

片眉をはね上げて、陽子はだん！ と今一度教壇を叩く。

「何よみんな！ 反応悪いわね。転校生よ転校生！ わがクラス始まって以来初のイベントよ。もっとうこう、『えー！』とか『なんだとー！』とかそういう——って……あれ？」

そこではじめて、彼女は気付いたようだった。自分が、クラスクラスの空気から浮いていることに。

そう。教室の皆のまなざしが向かう先は、彼女のほうではななく——

「なに？ これ。どしたの？ なんかあったの？ ゆずながど

うかした？」

陽子の問いかけに、みんながようやくまなざしを巡らせる。

窓辺で石になった若木 ゆずなから、教壇のほうへと。

が。

「雨宮って言ったよないま」「言った」「言いましたね」「転入生

って」「なんで若木は」「情報とか」「そういうの疎いのにゆずな」

「いったいどういう」「関係が」

交わされるとよめきの声とともに、皆の注目は再びゆずなに
戻っていく。

「ちよつと！ なんなのよ一体！」

流れから完全に残り残された陽子は、日誌を放りだして両の

手のひらで教卓を叩いた。

「あたしにもわかるように説明しなさいよ！ ええい、ほら、

みんないったん黙んなさい！ はい、静粛に静粛にー！！」

「……静粛にするのはまずお前だ、小野寺」

「——はう！」

真横からかけられた低い声に、陽子の身体が硬直する。

いつの間に、そこに立っていたのか。

猫背気味の長身に羽織った白衣。ぼさっとした長めの髪と、

あまり血色が良いとはいえないやつれ気味の顔。

学会から追放されたマッドサイエンティストを思わせる風貌

は、一年一組担任・鹿島 宏二先生かしま こうじのものだ。

「それと、日誌は丁寧ていねいに扱つかえな。破れたりしたら、新品弁償
のうえで四月一日から昨日分まで居残りいこりで丸写しまるがしだぞ」

「は、はい！」

陽子は慌あわてて、丸めていた日誌を教卓に置いた。鹿島先生は
見かけほど恐い人ではないのだけれど——暗めの笑みを浮かべ
たまま静かに呟つぶやく声には、えもいわれぬ真実味と迫力がある。

そそくさと退散した陽子にかわって教壇に登った先生は、実
際に日誌の裏表を仔細しじゆに点検して、それからあらためて教室に
目を向けた。

昨日の天気のことでも話すような、そっけない声でひとこと。

「……まあ、そういうことだ。転校生を紹介する」



「……雨宮 旬あまみや しゅん。降る雨に、お宮参りの宮に——上旬下旬の旬で
す。

すこし中途半端な時期ですけれど、家の都合みくらはしでこの御蔵橋みくらばしに
引越してきました。よろしくお願いします」

淀みのない、穏やかな口調。

先生が黒板に名前を書いたにもかかわらず、律儀に漢字の種類まで説明して——転校生は深々と頭をさげた。

ばらばらっと礼を返しつつ、一組の皆は壇上に興味津々のまなざしを投げる。

先程の陽子の言葉ではないけれど、人の動きがあまりない旧都・御蔵橋に、転校生というのはただでさえ珍しい出来事だ。

そしてそのうえ、その転校生が楚々とした風貌の美少年で。

さらにはその美少年に、われらがクラスの一員が何かの関わりがありそうだとくれば——

ざわざわと、教室内がどよめく。夏生や陽子あたりはもう、いまにも手を挙げて質問攻めの口火を切りそう。

「あ——」

その気配を察して、鹿島先生がげんこつで軽く黒板を叩く。

「いろいろ聞きたいのは分かるが、授業を始めるぞ。話はまあ、休み時間にもゆつくりとな」

えー……という不平の声と、集中する恨めしげな視線。だがそんなものに臆する鹿島宏二・教師生活二十年ではない。

「じゃ、まあ、雨宮。席なんだが——」

何事もないように教え子たちを一望し、ああ、とひとつ頷く。

「若木の隣が空いてるな。ほら、そこ。窓際が一番後ろだ。黒板とかが見えにくかったら後で聞くから、とりあえずはあそこに座ってくれ」

はい、と礼儀正しく答えを返して、雨宮旬が歩き出す。クラスじゅうの注目の中、この朝の一年一組におけるふたつの台風の目はゆつくりと接近し、そして重なった。

雨宮旬は足をとめる。新しい学級の席。その隣。先程からのどよめきの中でただひとり、貝のように黙してうつむいた少女の前で。

刹那——

「あ——」

教室内に生じた妙な静けさの中、彼の唇が微かな声を漏らした。

その声に弾かれたように、彼女——若木ゆずなが顔をあげる。真っ赤に染まった頬。きゅっと引き結ばれた唇。猛スピードでまばたきを繰り返すどんぐりまなこ。油の切れたロボットのような動きにあわせて、ちいさなおさげ髪が上下左右に跳ね揺れる。

「よ——よろしくおねがいます！」

蚊の鳴くような調子で始まったあいさつの声は、途中で制御

を失って教室いっぱいに響きわたる。

「よ、よろしく」

それまで静かだった転校生の声が、はじめて少しだけ動揺に揺れた。

ゆずなの大声に気おされて、というだけではなさそう。色白な彼の頬がほんのりと紅潮するのを、その瞬間クラス全員が目撃した。

——なんだ、これは。

みんなの頭に渦巻く疑問の渦が、よりいつそう深くなる。

当の若木 ゆずなは、周りの視線を気にする余裕もないようだし、教科書までもつてなかつたらみせるから！ などと本とノートの束を鞆から出そうとしてももの見事に周囲の床にばらまいてしまう。対して、ありがとう、とお礼を言いながら回収を手伝う雨宮 旬の表情も手つきもどことなくぎこちなく。

——でも、とにかく、なにかある。このふたりは。

統一した確信が、みんなの頭の中にできあがる。

結論から言ってしまう。

それは、すべからず誤解であつて。

その「なにか」の中身なんて、昨日の城址公園での例のちょっとお間抜けで些細な一件のみなのであつて。ただ単に、若木

ゆずなと雨宮 旬の両名が照れ屋で不器用あることがこういう事態を引き起こしているだけなのであつて。

けれども。

そう、いうこと、の始まりというのは、えてしてこんなふうだったりするもので。

—— 当人たちの意志がどうこうなる前にちよつとした手違いで外堀が埋まってみたり、そもそもそのきっかけはくだらないくらい小さいな偶然であつたり、そういうことはよくあることで。

これが、ここから数日の波乱の日々の幕開けであること——

そうして、それよりもとずっと長い心の騒乱のはじまりであることを、

若木 ゆずなはもちろん、このときまだ知らなかった。

つづく

既刊紹介

■ゆずな歳時記 1

(A5版72ページ・300円)



古い石垣と水路が緑に映える城下町、御蔵橋。

和風喫茶店の一人娘・若木ゆずなは、中学校からの帰り路、お城の石垣の上から舞い落ちてきた一枚の葉を拾う。落とし主を探そうと登った石段の先、彼女を待っていた出会いとは――

旧い城下町の四季を背景にのんびりペースで繰り広げられる、少年少女ほのぼの初恋群像劇。第一話〜第三話を収録。

■ゆずな歳時記 2

(A5版104ページ・400円)

あの雨の日――目にしてしまった匂の涙に、どうしていいかもわからず戸惑うゆずな。

かつてこの町が、みんなが自分を温かく迎え入れてくれたように……彼のため、自分にできることは何なのか。ひとつの決意を、ゆずなはきこちなくも心に刻む。



■ゆずな歳時記 3

(A5版148ページ・400円)

ゆずなのクラスメイト、水泳大好き少女の堤夏生と、その幼なじみである井沢慎吾。お互いについての意地を張ってケンカを繰り返すふたり。プールの時期も始まった初夏のある日、水泳部顧問の先生から持ちかけられた提案がきっかけで、彼らの間には微妙なすれ違いが生じて――

梅雨も明けていよいよ夏本番の御蔵橋を舞台にした、第七話〜第九話を収録。



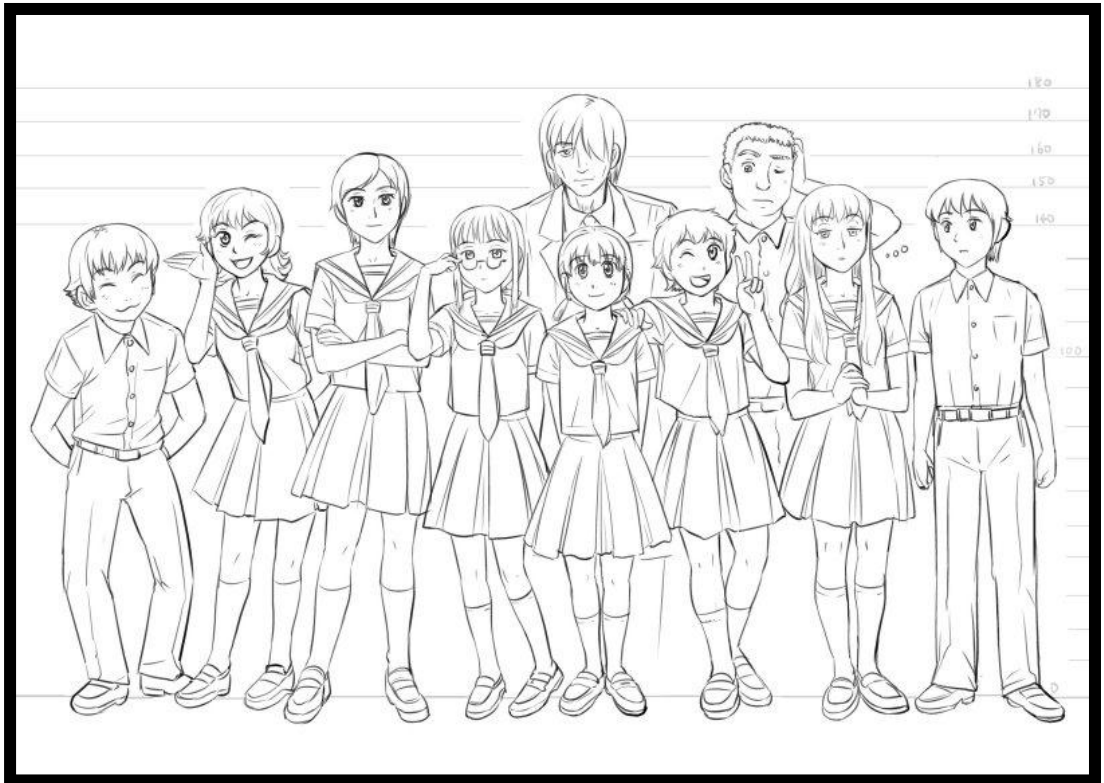
そして、ふたりを見守るクラスの友人たちは――城下町ほのぼの恋愛群像劇、第四話〜第六話を収録。

あ と が き

そんなわけで、この本はサークル懐中天幕がイベントにて刊行しております城下町初恋群像劇、『ゆずな歳時記』のお試し版です。

僕つむぎゆうの、女子中学生キャラ好き、元気っ娘好き、眼鏡好き、セーラー服好き、第三巻収録の第七話～第九話では、スク水成分も加え、好みの要素をありったけ詰め込んでつくった作品です。

例によってのんびりペース(発行スピード& 作内での物語の進行の双方が(汗))なシリーズになってしまうとは思われるのですが——もしもよろしければ、イベント等でお手にとりてやってくださいまし！(サークル情報は、この裏の奥付ページに書いてあります)



このお試し版には、まだ登場していないやつらが2名(男女各1名)ほど混じっていますが……

■ ゆずな歳時記 お試し版 ■

発行 : サークル『懐中天幕』

発行者 : つむぎゆう

mail tumugyun@tkc.att.ne.jp

HP (『LITTLE RIDDLE』)

<http://home.att.ne.jp/red/tumugyun/>

(現在のところ、G o o g l eで「懐中天幕」で検索していただくと

一番上に出るようです)

TWITTER: ID = [tumugyun2](https://twitter.com/tumugyun2)

<http://twitter.com/tumugyun2>

発行日 : 2010/09/01

2011/04/30 第二版